



角田 石川家
内外二六枚

郷土のかぜ

仙台市民図書館 郷土資料コーナーから

『 榴ヶ岡の地名 』

郷土資料担当 渡邊 啓市

時が経つのは早いもので、令和2年も残りわずかとなりました。

現在、4階郷土コーナーでは、コロナウイルス感染防止対策として、当分の間、一部の自由閲覧席の間隔を空ける等の対応を行っております。また、レファレンスについても、1時間以内の対応として、時間内に回答できない場合は、後日調査結果を連絡先に報告することにしておりますので、ご理解の程よろしく願いいたします。

ところで、多種多様なレファレンスの中でも、皆さまから多く寄せられる質問は地名・町名に関するものかもしれません。自分が住んでいる地域の地名の由来、住居表示の実施などで消えてしまった由緒ある町名、難しい漢字で読めない地名など、いろいろな質問を承ります。

先日、仙石線に乗車する機会がありました。午後を過ぎておりましたので、それほど電車は混んでいる様子はなく、普通に座ることができました。

すると、私の近くに初老のご夫婦が同乗されておりました。ちょうど「榴ヶ岡駅」に到着した時、旦那さんと思われる男性が、駅名表示板を見て「つつじの漢字って、こう書くのか」と感心しきりに奥様らしき女性に話しかけていました（東京の京王線には「つつじヶ丘駅」というひらがな名の駅があります）。

その時ふと、以前「榴ヶ岡」の読み方や町名の由来などを聞かれたことを思い出しました。その際、質問の回答で参考にさせていただいたのが、菊地勝之助・著『仙台地名考』でした。

その本には、その昔この岡に躑躅（つつじ）が多く咲いていたのが由来とのことで、「つつじ」の文字については「榴〔榴（りゅう）〕の文字は、普通に「ざくろ」と呼んでいるが、古事類苑などによると、山榴（やまつつじ）と呼んでいる。おそらく躑躅（つつじ）の文字の字画が多いので、榴の字を使用したものと思われる」と書かれておりました。

地名・町名の由来には、その土地の地形や風土、動植物や人物、神社・寺院、人の職業に因むものまで様々なものがあります。

市民図書館では、前述の『仙台地名考』のほか『宮城県地名考』や『みやぎ地名の旅』などの参考資料だけでなく『角川日本地名大辞典』や『日本歴史地名大系』などの地名辞典もございます。

なお、調べてみたいと思った地名・町名でも、今では由来のわからないものも多数存在しておりますので、まずは、4階郷土資料カウンターまでお声がけください。

<参考図書>

『仙台地名考』 菊地 勝之助／著 宝文堂 S29.1キ

『宮城県地名考』 菊地 勝之助／著 宝文堂 S29キ

『みやぎ地名の旅』 太宰 幸子／著 河北新報出版センター S29タ

『角川日本地名大辞典』 角川日本地名大辞典編纂委員会／編 R291カ

『日本歴史地名大系』／編 平凡社 R291ニ



『仙台風』について

郷土資料担当 八代 右子

『仙台風』と書いて『せんだいぶり』と読む。昭和41年に名古屋で発見された写本(肉筆)の風俗資料で、さっそく当時山形大学教授で発見者でもある浅野建二氏が、解説付きで河北新報(S41.2/22~3/31付朝刊)の紙面に発表した。当館では、下記の参考資料で翻刻(活字)を読むことができる。

著者・年代ともに不明だが、成立は本文中の歌舞伎役者や学者・書家等から、江戸時代の天明の頃と推定され、作者は、仙台の祭礼・神事、年中行事、食物、人情、音曲、衣服等を京・大阪と比較する能筆・能文から、両地の風俗に詳しい教養豊かな人物を思わせ、山片蟠桃(やまがたばんとう)の名もあがる。

書出しの芭蕉の辻の繁盛ぶりは現代にも引けを取らず「余所の国からうらやみ住(ずま)イは此(この)御国とぞ申(もうし)けり。」としているが、人間の気質能力に対しては非常に厳しく批判的で、「惣じて此国の人生(うまれ)付(つ)いて口きたなく尤(もっとも)大酒好ム也。一(略)一 曆(歴)々人の家も軒端まばらにくされ落(おち)、屋根もり畳はやぶれ、手足真くろにあかつきたる、湯銭六文もなきせうこ(証拠)、破(やれ)袴(ばかま)にはげたこじり(鏝)、人の内ゑきて懐中より手紙など取出し、読(よむ)かと見ればひきさいて鼻をかみ、是ちり紙さへかんりやくする也。然(しか)るに其朝夕の膳部ヲ見れば、余所(よそ)の国の御大名の料里(理)のごとし。」とまでの言われよう。

…どなたか反論してくれませんか？

<参考資料>

『洒落本大成 第14巻』中央公論社 913シ

『日本庶民生活史料集成 第9巻 風俗』三一書房 R382ニ



■新着図書紹介(郷土・参考資料コーナーに新しく入った図書)

『あいたくてききたくて旅にでる』

小野和子/執筆 清水チナツ/編集 PUMPQUAKES

S38 A

ひとつのおはなしが長くその人の中に残り心の支えとなることがあります。語り継がれてきた民話には 先人たちの深い知性やユーモアがあり、きびしい現実を生きぬくための祈りのような想いがこめられているからでしょうか。宮城県を中心に 東北の村々へ民話採訪の旅を半世紀以上続けている小野和子さんの旅日記が 美しい本になりました。18の民話とともに 語り手たちの背負ってきた人生もあたたかく綴られています。歴史には残らないほんとうのはなし―「消えていく泡を掬うような気持ちで民話の足元で見え隠れしたものを記しました」という著者の言葉が静かに心に響いてきます。



『伊東豊雄 自選作品集 身体で建築を考える』

伊東 豊雄/著 平凡社

S52 I

市民図書館があるこの「せんだいメディアテーク」ができた時、なんて不思議な建物だろうと思った方が多いでしょう。中に入ってみれば樹木のような透明な柱が壁のない空間に生えています。外側はガラス張り。公共の建物として斬新すぎると当時は批判も多かったこの建物。今では世界中から人が集まり、仙台の名所となっています。

せんだいメディアテークの設計者である伊東豊雄氏は建築家にとってのノーベル賞プリツカー賞を受賞した世界的建築家です。豊雄氏自身が納得のいく作品だけを集めた自選作品集の1ページ目は夕暮れの定禅寺通りに浮き立つせんだいメディアテークの写真。豊雄氏がこの建物に込めた思いや諏訪で暮らした幼い頃の話や、震災を経てたどり着いた「地域を考えることこそ明日の建築を考えることにつながる」という思いもつづられています。



■編集後記■ 今回紹介した図書資料につきましては、貸し出し可能な資料もございますので、まずは、4階郷土資料カウンターまでお問い合わせください。これから寒さが厳しくなる時期を迎えますので、利用者の皆様もお体には十分気を付けて元気にお過ごしください。

発行: 仙台市民図書館 郷土・参考資料コーナー

所在地: 仙台市青葉区春日町2-1 せんだいメディアテーク内 TEL: 022-261-1585